

巻 頭 言

粟屋 剛 (岡山商科大学)

本誌「北海道生命倫理研究」はこのたび第6号の発刊を迎えることができた。ジャーナルを滞りなく継続できる体制を誠に喜ばしく感じている。2017年度からは、北海道生命倫理研究会のHPも公開している (<http://web.sapmed.ac.jp/hokkaido-bioethics/>)。

本号の原著論文「共同体形成の困難な社会——高齢者との関連において」においては、独居高齢者調査研究に携わってきた船木氏が、共同体形成の哲学的問題に取り組んでいる。現代社会の共同体形成の困難さが高齢者の人との結びつきにも影響を及ぼしていることを指摘すると同時に、課題解決のための糸口を示唆している。

北海道生命倫理研究会は毎年2回セミナーを開催しているが、2017年度夏季には、二つの講演と三つの報告がなされた。一昨年札幌、留萌、釧路、黒松内で行ってきたインタビュー調査に関する報告がなされるとともに、「この地で死ぬということ——おとろえをうけいれる」と題する講演及び「個人情報保護法等改正と医学研究倫理指針の見直し」と題する講演がなされた。本号では、地域の終末期医療と研究倫理に関するこの二つの講演を踏まえた「研究報告」及び「報告」が収録されている。冬季には、進行する独居高齢者調査研究を踏まえ、哲学、宗教学、人類学の観点から三つの報告がなされた。本号では、共同体形成に関する原著論文一報、並びに、死者との共生、及び女性の老いの様式に関する研究報告二報が収録されている。また同セミナーでは、「幸福論の系譜——享受の幸福と活動の幸福」及び「統合医療と倫理」という二つの講演がなされた。前者ではアリストテレス、ルソー、デカルトのテキストを踏まえた、特にひとりであることの幸福について有意義な示唆を得ることができた。また、後者の講演の後、統合医療の効果と包括性に関して活発な質疑応答がなされた。

本誌では毎回「学会レポート」が掲載されている。本号では、日本医事法学会総会、日本医学哲学倫理学会大会、医療の質安全学会学術集会の報告に加えて、日本遺伝看護学会学術大会の参加報告も収録した。新たな研究動向に関する知見を得る機会になればと考える。

広報の幅を拡げ、研究活動への参加者が若干増加の傾向にある。しかし、北海道を中心としながらも道内外から多彩な参加者を得ること、及び他の研究会との交流を活発にすることが今後の研究会発展のための重要な課題であろう。また幅広く原著論文の投稿数を増やすことも課題として指摘できる。本誌を手にした皆さまには、是非とも北海道での生命倫理研究に関心を向けていただくとともに、参加交流へのお声かけをしていただきたいと切にお願いするところである。